

日新舎友蕎子著『蕎麦全書』を解く

～ 江戸ソバリエの教科書 ～

江戸ソバリエ認定委員長

深大寺そば学院 学監

ほしひかる

第 I 部 謎の日新舎友蕎子

江戸中期ごろ日新舎友蕎子という蕎麦人がいました。ただ「日新舎友蕎子」というのは筆名であって、彼の氏素性はまったく分かっていません。

この人物は一体何者でしょうか？

それを少し探してみたいと思います。

1. 『蕎麦全書』(1751年刊)について

①日新舎友蕎子著の『蕎麦全書』を開きますと、蕎麦についてあらゆることが記載されています。

新蕎麦、深大寺蕎麦、蕎麦打ち、蕎麦打ち道具、蕎麦汁、薬味、蕎麦湯、有名蕎麦切屋、新吉原の蕎麦屋、江戸蕎麦の初め(けんどんそば、ぶっかけそば)、蕎麦粉屋、蕎麦産地、その他。

わけても最初に新蕎麦のことを掲げているところに江戸っ子の蕎麦好きの思いが込められているように思えます。

とくに蕎麦湯の一文は蕎麦湯の初見として有名な史料となっており、【江戸蕎麦】の歴史から見ても『全書』の価値を高めています。

さらには薬味の記述に熱心で、和食文化の視点からも『全書』の貴重さを示していると思います。

②また、何かにつけ深大寺についてふれています。

たとえば、深大寺蕎麦の由来、あるいは和泉町新道の蕎麦屋「鳴子そば」は深大寺蕎麦が評判がいいので、その近辺の鳴子と付けたとか、神田鍛冶町横町の蕎麦屋「武蔵の蕎麦」は深大寺蕎麦の意味から名付けたなどです。

新蕎麦への思いから産地の近い深大寺蕎麦を大切にしたいところが蕎麦好き江戸っ子にあったのでしょうか。

総じて言えることは、これは「江戸蕎麦全書」、あるいは江戸ソバリエの教科書のような書だということです。

2. 日新舎友蕎子

それにしても『蕎麦全書』とはいい題名です。また筆名の「友蕎子」も、いかにも蕎麦好きらしさが表われた名前です。後世、「蕎聖」と呼ばれた片倉康雄(「一茶庵」創業者)も倣って「友蕎子」と名乗ったぐらいです。

ただ残念なことに、この名前は他の史料にまったく出てきませんし、自著の『蕎麦全書』にも個人的なことはあまり書いていませんので、どういう人物なのか何も分かっていません。

それでも、多少の手掛がないものかと、それらしい記事を拾ってみたいと思います。

①そこで、先ず問題にしたいのは、江戸の何処に住んでいたのか？ ということです。

*友蕎子の幼少期

その前に、幼年の時は浅草華川戸に吉田屋があったことを述べているところからしますと幼少のころは花川戸(華川戸)で育ったのかもしれませんが。

*友蕎子の現在の住まい

そして、現在の住まいですが、『全書』に「近辺」の蕎麦屋を紹介していますので、そこから推察してみます。

堀江町一丁目に吉川屋、槌屋(玉屋)、
小船町二丁目新道に大和屋、
和泉町の楠屋、
堺町の福山、
の店を「近辺」だと言っています。

堀江町一丁目・小船町二丁目は現在の日本橋小舟町、和泉町・堺町は日本橋人形町です。

人は自分の住まいを先に書くものでしょう。ですから友蕎子は堀江町一丁目、小船町二丁目(現：日本橋小舟町)に住んでいたと思われまます。

*友蕎子宅の界限

次に、貴重な情報として、いわゆる「屋台蕎麦」についてふれています。

～夜中に売り歩く蕎麦を「乞食蕎麦」といいますが、うちの近辺では「米番蕎麦」といいます。それは近くに米屋があって積んだ米俵を寝ずの番をする者が夜中に蕎麦を食べるからです。～

この一文にも謎解きの鍵があります。それが「米屋」です。

享保期から、日本橋の、表河岸町、長屋町、七軒町、上伊勢町、下伊勢町、小網町、小船町、堀江町は「米河岸八町」と呼ばれていて、米問屋が軒を並べ、元禄年間(1688～1704))でもその数は140軒以上はあったといえます。当然、友蕎子が『全書』を上梓した1751年ならもっと多かったのでしょう。

これからも、友蕎子は小船町、堀江町の米屋のある辺りに住んでいたとみていいでしょう。

②友蕎子は何者か？

友蕎子は蕎麦打ち、蕎麦汁、道具について記載していますので一見して蕎麦屋かと思われまますが、そうではないでしょう。その理由は、

*予按ずるに

各章は「予按ずるに」で始まっています。「予(余とも書く)」とは、私ということです。しかし庶民的な蕎麦職人は使いません。たとえば後代ですが、夏目漱石の小説『趣味の遺伝』などでは主人公(知識人)は余と言っていますし、森鷗外の遺書は「余ハ少年ノ時ヨリ…」と書き残しています。友蕎子も「それなり」の立場の人だったと思います。

*谷村氏、平岡氏、松崎氏、土田氏

友人の谷村氏、平岡氏、松崎氏、土田氏について少しふれています。が、姓氏だけで詳細は述べていませんから、どういう人たちなのかはよく分かりません。ただいえることは、この友人たちが姓をもっているということです。これからも名だけの蕎麦職人や町人とちがって、「それなり」の立場の人たちのようです。それなら友蕎子本人もそういう立場の人物とみていいでしょう。

*江戸の町の開発者たち

先に「それなり」の人などと抽象的なことを申し上げましたが、視点を変えてみましょう。

江戸の開発経緯から見てみます。小船町の対面の伊勢町は北條氏政の弟の氏村が、小田原城が落ちてから江戸へ出て来て伊勢氏を名乗って土着、その子の伊勢善次郎が名主となったので、町名を伊勢町としたといわれています。

また米河岸は、常陸国の小田城主の末孫が、この地にやって来て米の売買を始めたことからだといえます。

このように江戸という町と文化は、元武士が上層町人となって創っていったのです。彼らは俳諧をたしなみ、茶道や食に通じ、また教養もあり、自制心があり、統率力もありました。

こういう人たちを“それなり”の人としておきたいと思います。

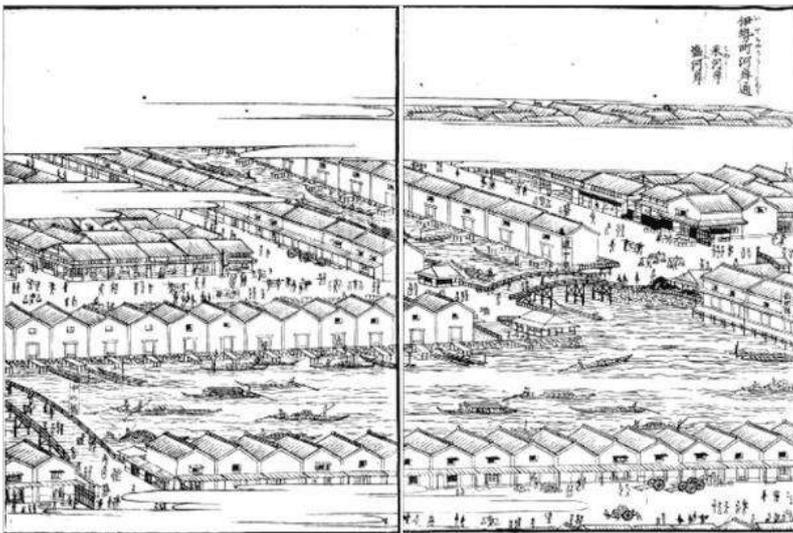
3. 謎の日新舎友蕎子

ここで謎の日新舎友蕎子について振り返ってみますと、(1)まず「米屋」のことなどから、小船町、堀江町の米屋のある辺りに住んでいたことは間違いないでしょう。そして付け加えるなら、(2)“それなり”の立場の人物と思われ、(3)性格的については文章からは自制的な人、それであっても「日新舎=日々新らしく」を名乗るくらい前向きな人でもあったろうことが想像できます。

(4)それから著書の『蕎麦全書』からは蕎麦全般に詳しい人物であり、また『本朝食鑑』などの多少の文献にも目を通すほどの知識人であり、(5)なぜか深大寺蕎麦を大切にしているところがあります。(6)そして何よりも「友蕎子」と名乗っているくらいの蕎麦好きか、あるいは蕎麦と縁の深い立場の人、ということが考えられます。

そこで、「小船町、堀江町に住み、蕎麦と縁のある」を謎解きの鍵とみて、他の史料を見てみました。

すると、『蕎麦全書』(1751年刊)にはありませんが、『七十五日』(1787年刊)という史料に、堀江町に「源代寺そば粉 舂屋」があったことが記載してありました。「源代寺」というのは「深大寺」の誤りです。『七十五日』の刊行は友蕎子の『蕎麦全書』の刊行よりやや後ではありますが、だからといって存在が後とは限りません。むしろ友蕎子と同時代と考えるべきです。



【『江戸名所図会 - 伊勢町通り』(評論社)】

そうであれば、友蕎子はその舂屋の影響を受けて深大寺蕎麦に親しんでいた。いや、むしろ友蕎子その人が舂屋の主人ではなかつと考えた方が、辻褄が合うように思えます。

日新舎友蕎子とは堀江町の深大寺蕎麦粉屋「舂屋」の主人！というのが私の推理です。

(説明：鉤の手のように流れているのが西堀留川、左下が中の橋その上が伊勢町と米河岸、川の右上に道浄橋と塩河岸、友蕎子が住んでいた堀江町は絵の手前)

第Ⅱ部 なぜ寛永寺公弁法親王なのか

日新舎友蕎子の本職は深大寺蕎麦粉屋だった。そうだとしたら、友蕎子が何かにつけ深大寺蕎麦にこだわったのは当然のことです。ただそのこだわり方が一流であるところが、『蕎麦全書』の価値を高めているところです。

以下、その方法について見てみたいと思います。

1. 東叡山寛永寺五世公弁法親王

何が一流かと言いますと、『蕎麦全書』は第一級の人物の登場から始まっていると言っても過言ではないでしょう。その人物は**東叡山寛永寺五世公弁法親王**といます。

日新舎友蕎子著の『蕎麦全書』には、こんなことが書いてあります。

～ 18年前に将軍家からお問い合わせがあったので、そのときの住職は、今から50年ほど前に上野大明院様へ深大寺境内で栽培した蕎麦を献じたところ、大明院様はそのお蕎麦を召し上がられ、風味が他の蕎麦とちがってたいへん美味しかったと周りの方々に吹聴されたので、深大寺蕎麦が高名になりましたと申し上げました。～

「上野大明院」というのは、**東叡山寛永寺の五世公弁法親王**(在位:1690～1715)のことです。

文面からしますと、献上された深大寺産の蕎麦粉を寛永寺内の僧が打って差し上げ、それを公弁法親王が召し上がられたのでしょう。

また、「18年前」というのは、『全書』が上梓されたのが1751年、取材はそれより前のことであろうから、ここでは1730年ごろと考えましょう。

「将軍家」というのは**八代将軍吉宗**(在位:1716～45)、**深大寺は六十八世権大僧都寂湛豪覚**(1754年寂)でしたので、吉宗から寂湛豪覚に問い合わせがあったということになります。そのころに何らかの理由で江戸城内で深大寺蕎麦について話題になったのでしょうか。

では、寛永寺五世公弁法親王という方はどういう人だったのでしょうか。

履歴を見てみればだいたい分かりますが、その前に寛永寺の法統は**天海大僧正**によって遷化された後、二世に**弟子の公海大僧正**が就き、三世からは皇子を迎えて「法親王」と仰ぐことになりましたので、それから寛永寺は江戸時代で最高で最大の権威あるお寺になったのです。

五世の公弁法親王は1669年、**後西天皇**(1638～85)第六皇子として生まれました。母は天台宗光源寺(大阪市平野区)の僧**智秀**の娘**六条局**(?～1680)という方です。第六皇子は1674年に護法山出雲寺毘沙門堂門跡(京都市山科区)の門主**公海**(1608～95)の室に入り受戒しました。祖父智秀のご縁によるものでしょうか。

ところが1690年に兄(後西天皇の第五皇子;1664－1690)である**寛永寺四世**(1680～1690)**天真法親王**が亡くなられたので、跡を継いで寛永寺五世(輪王寺門跡)に就任され、関東へ下向されました。

その後、公弁法親王は1698年に露座であった上野大仏に仏殿を建立。1703年には焼失していた**東叡山勧学寮**(天台学徒の修行の道場;『江戸名所図会』に絵あり:現在の西郷隆盛像辺り)を幕府直轄の観学講院として再興しました。

また1714年には願王院智周(1659～1743)に命じて『台宗二百題』を刊行しました。そして25年を経た1715年に諸職を辞任し、毘沙門堂に隠棲。1716年、毘沙門堂にて薨去されました。

公弁法親王の経歴としてはこういうところでしょう。しかし公的業績というのは寛永寺としての仕事ですから法親王ご自身とは関係なく進められるところがあります。

2. 《ごごめの大福》

その点、個人的な話題の方が公弁法親王ご自身を知るためには参考になります。ですので、よく知られている逸話を幾つかご紹介します。

*1698年、川越藩主**柳沢吉保**(1659～1714)が惣奉行となって寛永寺根本中堂を落成させ、公弁法親王を屋敷にご招待しました。その折に吉保は法親王から土産として《**有平糖**》を賜ったといわれています。

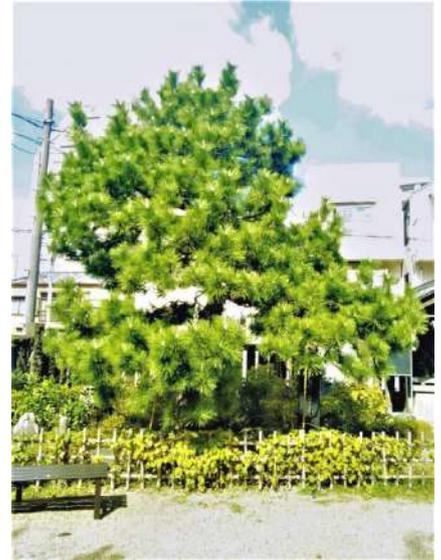
《有平糖》というのは美しく細工した西欧渡来の砂糖菓子です。今でいえば、珍しい高価なケーキやチョコレートみたいな物ですから、上層階級の人たちだけが楽しんだお菓子というわけです。そういえば、江戸蕎麦の初見記事として有名な『慈性日記』の**尊勝院慈性**(1593～1633)の父**日野資勝**(1577～1639)もこれを大変好んでいたといえます。

*1702年、公弁法親王は赤穂浪士討入事件を義挙としてとらえ、五代将軍綱吉に浪士に切腹を命ずるよう促したといわれています。

*元禄年間(1688～1704)、公弁法親王が御漆園の造営、漆の植樹をすすめたため、以後日光彫りや日光春慶塗が発展したそうです。

*1711年、公弁法親王が日光山の名勝八景【小倉山(754m)、鉢石宿、憾満が淵、寂光の滝、大谷川、鳴虫山(1104m)、神橋、男体山(2486m)】を撰んで、つれづれに陪従の僧徒・坊官らと詩作をこころみました。

*根岸の里の御行の松(台東区根岸3-12-38 西藏院)近くの音無川の畔の茶屋(現:竹隆庵岡埜)がこごめ餅に餡を包んで公弁法親王に献上したところ《こごめ大福》と名付けてくれたと伝えられています。



【御行の松】

3. なぜ寛永寺公弁法親王なのか

このように、公弁法親王という方は逸話の多い人物だったようですが、わけても《有平糖》《こごめ大福》《深大寺蕎麦》などのまったく個人的趣味が、今も言い伝えられているところが、面白いところです。

うち、筆者はとくに竹隆庵岡埜の《こごめ大福》に関心をもっています。

《こごめ大福》の名前由来として、こう紹介されています。

～江戸庶民の間で喜ばれたお菓子里「こごめ餅」があり、ある時、根岸の里の茶屋がこの餅に餡を包み入れ、上野輪王寺宮公弁法親王に献上したところ、お誉めの言葉を頂き、これを《こごめ大福》と名づけられました。～

いわば、《こごめ大福》の由来を公弁法親王に委ねたわけです。

同様に、日新舎友蕎子は《深大寺蕎麦》の由来を公弁法親王に求めたのです。彼は『蕎麦全書』にこう書きました。～近世世上に深大寺蕎麦流布し高名なるにや、十八年以前管家よりそばの事を有御尋けり。其時の住僧云、五十年斗り以前上野大明院様御時、境内より作り出せるそばを献ぜし事あり。其蕎麦を被召上しに、其風味甚他に異なりとて、御風聴甚しかりしとなり、其時より名高くなりしと也。～

一言で言えば、深大寺蕎麦粉屋「舂屋」の主人日新舎友蕎子は、【江戸蕎麦】の由緒正しきことを公弁法親王の名のもとに伝え、そのうえで【江戸蕎麦】について解説しているわけです。



【こごめ大福】

4. 『蕎麦全書』は江戸ソバリエの教科書

最後になりますが、友蕎子はその【江戸蕎麦】についても一つの伝言を示しています。

まずは、屋台蕎麦のことですが、友蕎子は乞食蕎麦(屋台蕎麦)に触れています。ただし友蕎子本人は近所であってもそれを食べずに、寝ずの番をする者が食べるものと話題にしているだけです。

こうした屋台蕎麦について、俗に「蕎麦は屋台から始まった」とか、「屋台蕎麦が江戸蕎麦の代表」みたいに言われていますが、それはちがいます。

屋台蕎麦というのは店舗蕎麦屋の閉店後から流しの商いを始めますが、店舗型とちがって水など不衛生ですから、一般的な店とはいえませんし、その数も不明です。明治初めごろは屋台は廃れており東京ではわずかに十数軒だったといえます。

それがなぜ蕎麦屋の代表のように思われてしまったかといいますと、おそらく明治時代、上方落語の「時うどん」が江戸で「時そば」として移されてから屋台蕎麦が広く知られるようになった、その影響からだと思われます。しかしそれはあくまでお笑いであって、歴史ではありません。もうひとつは高度成長期に駅構内に「駅そば」(原田マハはシャレで「プラットそば」と名付けています)が登場しました。こちらは現代ですから昔の屋台とちがって衛生的でしたので、企業戦士といわれたサラリーマンたちに好感をもたれたものでしたが、こうしたこともみも遠因にあるのかもしれませんが。

次に、逆の高級蕎麦のことですが、過日(株)にんべんにお勤めの知人に、にんべん三代目の高津伊兵衛(1714~79)の日記『三代日記』の一部を見せていただきましたところ、1744年に近江屋より蕎麦台物を贈られたり、1752年には遠州屋平兵衛の蕎麦饗を受けたりしています。『蕎麦全書』は1751年に上梓されていますから友蕎子と三代目は同時代の人ですが、友蕎子はこうした上層町人の蕎麦の世界にも触れていません。

その一方、友蕎子は町の店舗蕎麦屋を取り上げています。その蕎麦屋は一町に一店はあったといえます。そして名代の店は店名では呼ばずに、たとえば巴町にある砂場ですと「巴町の」と町名で言ったりするところがありました。それは店舗蕎麦屋がその地域に根付いているからです。

これらの状況から分かりますように、上層町人には上級の蕎麦会が、中間の町人には店舗蕎麦が、下層町人には下級の乞食蕎麦が在ったということを見逃してはならないと思います。なぜなら、当時は身分制度の時代です。

小説ではありますが、北原亜以子に『夜鷹蕎麦十六文』というのがあります。三度の飯も食うや食わずの貧乏家夫婦の会話に「夜鷹蕎麦は食べたことがあるけど、蕎麦屋には入ったことがない」という台詞が出てきます。暖簾をくぐると「いらっしやい」と言われるけれど、自分たちはそんな柄じゃないというわけです。身分制度の当時の情景をよく描いていると思います。

繰り返しますが、友蕎子の『蕎麦全書』は、上級の蕎麦膳と下級の乞食蕎麦の世界については触れずに、江戸の店舗蕎麦屋のみを対象にしています。

このことは、【江戸蕎麦】とは(店舗型)蕎麦屋の蕎麦のことと言っているのだと解すべきでしょう。

さて、「友蕎子」という筆名の「子」の意味ですが、初めは子供の意からできた字です。それが若者や男子の敬称に広がり、やがては自説を述べる人、学説を立てた人の尊称になりました。たとえば老子、孔子、孟子などがそうですから、紀元前にはそういう敬称が確立していたわけです。

日本の江戸中期ごろには自説を述べる人もふくんで愛好家的な敬称にもなっていました。ですか

ら、蕎麦粉屋として自説を述べたい者として、友蕎子の筆名は最高です。

友蕎子は、後世に【江戸蕎麦】を伝えるために歴史を訪ね、一方では現実をよく観ています。

われわれ江戸ソバリエも、友蕎子の伝言を真摯に受けとめて未来に伝えたいものです。

《参考》

* 日新舎友蕎子『蕎麦全書』

* 『江戸名所図会』（春秋社）

* 別府大短大江後迪子、共立女子大吉川誠次

『「七十五日」菓子屋編・飲食編にみえる食べ物について』

* 北原亜以子『夜鷹蕎麦十六文』

* 寺門静軒『江戸繁盛記』

* 原田マハ『やっぱり食べに行こう』

以上